句集

続・老いの坂

み仏と共に　（北摂・月峯寺にて著者）

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

（路　郎）

私の句

幾山河越えてわが道　悔もなし

（多久志）

序文

若本多久志君が、喜寿を迎える心のしおりに、句集「続・老いの坂」を発刊される事になった。時の流れは早いもので、句集「老いの坂」が出されたのは、昭和四十二年五月であるから、満十年以上たっているわけである。その当時でも、柳歴三十有年を持っていた彼であるが、あれからの十数年間、川柳もさることながら、容易ならざる実社会で活動を続けて来た社長業。その間彼が人間としての爛熟振り、努力振りは、門外漢である私のようなものでも、目をみはるのを感じて来た。勿論会社での職務内容や社長業の苦労など、くわしく知るよしもないが、折々活字になる随筆や、職場での「掲示訓」「凡愚のたわごと」「人づくり」等々の出版物から、充分肌に感じ得ることである。私は「老いの坂」の序文に、俳人子規の言葉を借りて、「総じてものには、はたらき無きは面白からず。されど、はたらき目立ちて、表にあらわれたるは却っていやしきところあり」と書いて、彼が、ただの凡人ではないことを、彼に対する餞の言葉としたことがある。

彼と二人で、さしで話していると、知らず知らず、彼の人柄に引き入れられる。

なぜだろうかと、時々思うことがある。彼はくりかえし言うのである。「自分が今日あるのは全く神仏の加護と川柳のおかげである。それには、諸先輩や同僚との、尊い出会いをしみじみと感じる外はないと」。なんだか、心を静かにして、真理を直感するというような――よく判らないが、禅定とはこんなことを言うのではなかろうかと、私はひそかに思うことのある彼の顔である。そして　ゆくりなくも、松原泰道師の言葉を思い出す。「仏法に会う」とは、永遠の青春ともいうべき柔軟心を身につけるといってもいいでしょう。しかし、若いときは、若さの誇りと自信から、老いを学ぶ気が起りません。この自己への奢りが、永遠の青春性を蝕むことを、このごろ気づいて後悔しています」と。私はこの言葉から、何んとはなしに、多久志君から、この「永遠の青春」という柔軟心が見えるような気がしてならない。

彼が書いた随筆「人づくり」の中で社員訓として「仕事のうえでも、極力脳を使うようにし、又運動による筋肉強化とバランスを採ってゆくことこそ、早老を防止しいつまでも青年であられる」とも書いている。そして彼は、彼の会話の中に「菩薩」という言葉をよく入れる。ついでに松原泰道師の言葉をかりると、「菩薩とい

うのは、教えやさとりを得ても、自分だけでなく、他者へもその安らぎを分け与えようと願い、かつ実行する人」とある。又彼が、昭和三十四年、句集「親ごころ、子心」を出した際、麻生路郎先生は、「本書が子を亡くした人たちの悲嘆を慰めるための力ともなり、親と子の愛のつながりがいかに深いものであるかを知ることが出来るとすれば、まことに有意義な書であると言わねばならない」と序文に書いて居られる。

この両師の言葉を併せ考えると、彼がこんど「続・老いの坂」を出した気持ちがよくわかる。それは、「続・老いの坂」の編集形態を見ただけでも判る。人生観を含めた老いの坂、一年有余に亘る最近の闘病、生死観、信仰問題、そして最後に雑吟、随想となっている。そして　私達が真似の出来ないことは、アイバンクへの登録や、さる尊き方から、「帰真院釋泰成不退位」という法名を早くから載き、こんどの句集刊行と期を同じうして自分達夫妻の墓を建立するなど、安住の彼岸の場所を得ている彼の心境である。恰好のいいことばかりの今日的生活は、なるべく避けて、仏のみ心にまかせて通る彼の姿。そんなものがすべてこの句集を通じて伝わるので

ある。　十年前、先輩の故清水白柳は「老いの坂」を評して、善良で常識の豊かな作者の裸の姿をどの句にも見ること出来て、思わず作者の手を握って振りたくなるような衝動をさえ感じさせる」と書いている。今は亡き白柳が、この「続・老いの坂」を読んだ時、どんな顔で歓ぶか、顔が浮かんで来るようだ。粉飾のにおいが少しもしない、オーバーな表現の句が一つもない、体当りの句ばかり、受ける爽やかさと力強さを満喫するのである。一句一句かみしめてゆきたい。そして、やがて来るであろうところの「続・続・老いの坂」の誕生を、皆さんと共にこころから祈念して筆を擱くことにする。以上。

昭和五十四年三月春分の日

川柳塔社にて

中島生々庵

もくじ

序文　中島生々庵　（7）
老いの坂　（29）
うつし世　（51）
闘病　（57）
死生観　（63）
信仰　（75）
旅　（83）
句会雑詠　（133）
雑筆あれこれ

老いの坂

レジスタンス敬老会へ不参とす

せめてネクタイ流行を追ってみる

ご老体などとは俺の気も知らず

年寄りのくるとこでなし純喫茶

無欲になつたなあと古稀近し

どの部屋にも老眼鏡を置いて閑

限界がきたと辞めたい日が続き

古稀近し晴耕雨読いつの日ぞ

老いぬれば夫婦喧嘩もいく久し

ケチでない小瓶にしとく老いの酒

正論が吐ける齢なり古稀という

老齢年金通知書とは寂し

敬老の日　　饗鑠と社長室

尊さは今日一日を強く生き

あれも死にこれも死に雑草の同窓会

充ち足りた余生とひとは言うけれど

いつもお元気で　とは歳を知っており

朝礼に立てば自嘲の明治調

頑固さもほどほどとなり古稀迎う

言わでものことと寂しく口つむる

晴耕雨読　俺の老後にそれはなし

書き終えてわが自叙伝のうつろなる

傷口をなめ合うように老夫婦

老妻もやはり入れ歯を洗うとり

老いてなお　子に従えぬ性寂し

ひたすらに凡愚の道を歩み来し

よつてたかつて老人にされかかり

晩年のゲーテにも似て燃えよかし

人生の最後　長の字をつけてみる　（会長就任）

早まつたとはよそ様のお世辞なり

会長室閑散として句に浸る

新しく生きる余生へネジを捲く

肩書きを一つずつとり人間となる

どの椅子も離れてみての空虚感

忘れるという智恵　老いのすばらしさ

欲一つずつ消えて枯淡の境とかや

我ながら無欲になつたなと寂し

つまずきの思い出ばかり老いの坂

久しぶりまともな挨拶聞く温み

古きよき時代の言葉暖ためる

老い果てて人と争う愚を悟り

ものわかりよい年寄りとは淋し

デパートに欲しいものなし老いという

誘われてまず辛度いと思う齢

白い花　こよなく好きになつて老い

筋を通して七十の声清し

視野広く　思索は深く老いを生き

羨やまれるほどの余生と思わねど

老人の七癖　正にあてはまり

迎合も妥協も不要　老いの坂

じんわりと効く漢方に老いを生き

食べたいものが一つ減り二つ減り

血圧を話題に老いの夕餉すむ

鉢植へ水　老いの心にも

ステツキが似合う散歩を自嘲する

あばら骨キリストに似て老い深し

明治生れにイヤな言葉が多くなり

刀折れ矢も尽き　うぬぼれだけ残り

今ははや食い意地ばかりぼたん鍋

ドライブはおやめになつてと歳を言い

新聞の訃報は齢を先ず調べ

亡母の夢見ぬこと久し老いて我　（亡母命日）

老いてなお　人を観る眼のあやふやさ

梳る髪の薄さに詩もなし

世渡りの流れに丸うなつて生き

漢薬が素直に飲めるのも齢か

青信号のんびりと待つ齢となり

晩節をなどとリキまず終らんか

我ながら角がとれたと思う齢

カップヌードルへ抵抗するも老い

人生の花道もチト長過ぎて

老骨と自称　ネクタイは赤にする

しかたなく三猿主義で生きんとす

老いぬればこよなく枯淡の味を愛で

出世とは何　瞑想の七十五

昂ぶりが少なくなつて老いの坂

うつし世

どれ着て行こか　老妻も女なる

ご気嫌になつて帰れば妻の顔

金婚まではと老妻にはげまされ

嫁に好かれたいと老妻哀れなり

又借りる時ありグッと噛み殺す

経営を手相観ごときに訊いてみる

皆様のデパート財布すられてき

記念撮影俺だけムッつりして写り

ああ　そやそや　貸しとつた金返り

老眼鏡　忘れた旅は窓により

おむすびを料理屋で食う別の味

金ですむ話ながらも年の暮

君も成長したなと口惜しくもあり

モーニング着てから口上教えられ

冬山のポスター遭難もありと書け

この人も洒落が解つて飲み仲間

父の日の無かつた頃の父想う

子には子の人生がありさりながら

そつとしておけ月は観るものぞ　（米宇宙飛行）

体験で諭す社長は明治なり

デパートの虫も初秋をつげてくれ

湯の宿の朝酒　極道も仕果てた身

飲まされた飲ましてやつた嘘とうそ

傷ましやミニスカートの座りだこ

エスカレーターコテイの匂う下に立ち

インタビュー　煙にまいて帰す智恵

三度目に着替えて本人らしくなり

掛け引きという言葉さえうとましく

原稿の桝目　口ほどに埋められず

駅弁の情緒むなしく車中売り

金貸したばかりに友が一人消え

漢薬の匂いおならに出て寂し

（敬老の日）

敬いの言葉そらぞらし　菊見入る

除夜の鐘古稀を迎える齢で聞き

淡々と古武士にも似た越年よ

実印のいること多し十二月

比類なき名曲として除夜の鐘

孫　二句

蚤つて何？孫への返事四苦八苦

俺の血がだいぶ混つてヘソ曲り

八・一五の思い出

コンサイス破つてタバコ巻いた日よ

その朝もたしかイモ粥わけて食い

西鶴の恋太棹でしぼり出し

こういらで拍手　やんわり水を飲む

諒解はしても納得しておらず

お倖せにと女の言葉うつろなる

豊かなる生活もかなし石油危期

G・N・P驕る平家の末路かな

利用して生き　利用されて生き

せめて俺だけでも人を信じよう

年寄りを敬語で責めて黙らせる

古傷を水子地蔵に掌を合せ

頷いてくれた返事は母の味

福祉　福祉と恩に着せられる

お返しが心に重い品を受け

時折りはふつと食べたい湯葉料理

さりげない老いの言葉が刺となり

絵看板時の流れに眼をつむり

友情と別に商魂ぬけ目なく

美味求真それにつけても金が要り

顧みて時効になつてる罪の数

書架いつか長生きしたい本を積み

特価品売り場へ行かぬ意地をもち

今様の言葉にムッとするも老い

排ガスの中に寂しく芭蕉の碑

晴耕というにはわびし花いじり

先輩々々と利用されており

ネクタイの売り場で値段聞いただけ

赤トンボ今年は秋が短いぞ

横綱の背中についた砂寂し

性格の通りみかんの筋を取り

憤満に耐えて世相に背を向ける

先生と呼び先生と思うてず

孫三つ既に反旗をひるがえし

読み切れぬ蔵書抱えて道遠し

師言正なり　畳一帖に寝る

人間でありたい欲は残しとき

一杯の味噌汁にさえ朝の幸

誘われた釣りと魚も知つており

けつまづく小石に落目覚る老い

いたわりの言葉を刺と思う日も

晴耕雨読　雑用が多すぎる

闘

病

傷病のすべては神にと医祖パレー

禁酒禁煙主治医ひとごとのように言い

入院を勧める主治医の眼を信じ

僕の老父ならこうという診断

塩かけて食べたいものを夢にみる

親切が過ぎるナースに気が廻り

心にも注射を打ってほしい日よ

手術断念

あえて毀傷せず亡き父母にまみえんか

もうあかんのか　酸素吸入かけられる

枕元あの顔この顔なつかしや

娘等に喪服はあるなと念をおし

アイバンクへ電話　忘れなやとも言い

ひび入りの茶碗にも似て今日も生き

漢薬がほつこりと効く齢となり

痩せたい妻肥えたい夫ともに病み

治つたらこの旅あの旅夢の路

片肺で生きる人あり頑張ろう

血圧を下げる本にも養生訓

医者からの注意　わびしいことばかり

死生観

凶弾に倒れることも美と思う

ワッハッハと笑つて命終らんか

人生の秋の稔りも中くらい

もつたいなくもチト長生きを悔い

人生を夕陽の如く沈まんか

俺の葬式こうしてほしいプラン練る

遺言状書きたすことのメモふくれ

風葬にして欲しいなと思う日も

自分では余生などとは露ほども

天の声もうお迎えが近いぞや

忘れるという有難さわかるまい

捨てるもの皆捨て終点ま近なり

菊薫る頃に死にたい夢も持ち

櫛の歯の抜けるが如し　無常感

無常とや　賀状と共に聞く訃報

燃えるもの尽きて枯淡の人生か

信

仰

み仏はえくぼのままで何千年

念仏申し候えど娑姿がよく

親鸞も同じ思いの嘆異抄

み仏は話しかけたい御姿

五蘊盛苦ああ人間の業なるか

弥陀三尊青葉の蔭に微笑給う

磨崖仏刻んだ人が生きてる眼

目覚むれば又一日の冥加かな

帰依五十年宿業の深さ知る

吾足るを知らず凡愚の夢多き

国東の旅　み仏にみちびかれ

み仏の里を巡りて老い二人

同行二人　仏の里に杖をひく

石仏の肌さむ寒と小雪ふる（S四九、一、国東にて）

妄念は身にあるまじきものばかり

寂とした一瞬菩薩の座に坐り

覚つても悟つても海の深さ哉

この旅も浄土へ続く旅なるか

捨てるもの捨てたつもりがまだ悩み

お人好しといわれる心に弥陀が住む

悟れない凡愚に弥陀の救い知る

耐え抜いて得たものはただ無常感

物価高仏にすまぬ造花を立て

無に還る　そんな言葉が解りかけ

有為転変　信じるものは仏のみ

石仏を巡ればすすき秋深む

施しの喜びジーンと心満つ

白鳳の壁画　極楽とはかくも（法界寺にて）

もう少し娑婆においでと阿弥陀さま

解脱には遠くあせりへ合掌す

宿善の余命か静かに合掌す

何もかも冥加に余る寝正月

今日も又仏のような人に会い

人の子の親とは悲し　深き業

信仰と別に三山巡礼し（湖東三山）

捨てるものまだ捨て切れず凡夫たり

ふと亡母を求めて三十三間堂

安養の浄土と聞けど業深く

旅

古都慕情　吉井勇の歌碑に佇つ

先斗町二階に夢二画く女

六阿弥陀巡つて浄土探る旅

真如堂　去来の墓の寒々と

ふるさとの夜空こんなに星の数

箸紙にそれぞれの味旅七日

露天風呂独り沈めば虫の声

山菜の味も書き添え旅便り

紅葉のふたひら三ひら露天風呂（十津川にて）

鱈ちりの味なつかしき雪だより

松籟の和語ふるさとはそのまんま

晴耕雨読へ旅のポスターが招く

平戸なるマリヤ観音悲しげに

宮城前　敗戦知らぬ子が集い

一こまの歴史へしばし瞑想す　（長崎にて）

妓生もよし石仏もよし韓の旅

古都慶州癈仏毀釈の跡寂し

石仏を巡りて老いの糧とする

訪欧の旅

マドリッドパリーローマと夢駆ける

ロンドン塔にて

ギロチンの恨み数々秘めて建ち
血ぬられた王冠の秘史ロンドン塔

パリーにて

金色に塗られジャンヌ・ダルク迷惑そう

マドリッドにて

フラメンコ顔よりタップの音に惚れる

アンデルセンの像（コペンハーゲンにて）　隅つこでかしこまり

古代史の謎解きかねて除福の碑（新宮にて）

西行や芭蕉の道に及ばねど

川柳塔社

句会雑詠

（入選句より）

何むかついたのか大工プイと去に

先頭の羊　指揮官らしく行き

ジリ貧のまま中風が出てしまい

何もかも知つた女の眼が燃える

勉強はもうせんでええ入社式

叙勲辞退　淡々として世に生きる

欲のない顔をしてたら素通りし

庇なら無断でもよい雨やどり

長は長でも人夫の取締り

歌手になる野望を秘めてコンクール

下宿から母への土産洗いもの

執念をこめて鋳物師砂をかけ

お迎えはまだかと死にそうな顔でなし

親の墓建てしぶちん見直され

ガレージの泥ひき逃げの足がつき
戸籍には好いたどうしと書いてなし
堀江新町　昔と違う朝が明け
五分ほど　かけ値を言うてゆり起し
飛び降りたとこに刑事が張っていた

辷り台小さい権利主張する

進化論なるほど俺にも尾骶骨

枕元ズラリ遺産をねらう顔

聖書にもこう書いたると意見され

坂道で恋を語れば息が切れ

風船のような夫とくされ縁

ストローを吸い吸い何処へつれていこ

里帰り三日も食べぬように食い

声変り引出しみんな鍵をかけ

ポケットに何か秘めてる声変り

角帽をきせたい夢の雑役婦

ツケがきく店へわざわざ廻り道

服替えて財布忘れてきた電車

三味線でジングルベルの忘年会

火葬場の値上げうつかり死なれない

年ごろの娘がありカバーかけて読み

ハナ声で背のチャックを頼まれる

倦怠期せめてよろめき映画観る

人生のスタートどちらも借り衣装

満期まであと十年の身をいとい

勝気さを喪服に包む未亡人

うかりと旧姓書いた荷札つけ

開店へ義理のお客は早よう去に

山が好きそれで縁談まとまらず

山で得た恋山頂で式を挙げ

違約ずらり伝言板は責めており

昼酒が好きで信用出来ぬ人

節くれた指　ベテランという自信

又かいなと桃の流れる話なり

パトロンを替えてマダムのリベラズム

子宝を感謝したのは二人まで

まて貝はどうしたことかヘンな形

病院の窓からよその子は達者

席順はまんざらでない床柱

気まぐれに口説けばあんたそれ本気

ゲームの執心　上役を意識せず

とことんまで値切つたあげく月賦やで

俺だけがいつも違反を見つけられ

受持ちが違うと役人煙の輪

前歴が生き抜く道を又ふさぎ

金繰りに行く片道は空の旅

倒産も知らず煙突天高し

編み直す毛糸胎動かすかなる

老妻に言い負かされて笑う齢

えらいこと言うてしもうた人違い

仮病どうし初発電車へ竿をさげ

後釜を決めて養子は追い出され

民主々義とんでもないのを上位にし

先廻りされて思惑にが笑い

担ぐ人ぶら下る人　神輿派手

雀にも案山子の顔に好き嫌い

お浄土もよいがやわらかい女の手

裏切つた女のよいとこだけ残り

再起する決意印相みて貰い

追善供養借金はそのまんま

何でもない時の天気図よく当り

ポイントだけ教えて後は考えろ

お見合いでハンドル持てることも言い

表情はもう許してもよい微笑

家元を迎えて京は春がくる

出稼ぎの涙はくにから子の手紙

駐車場買い物せぬのも二三台

小正月黒豆だけがまだ残り

通帖と判は上位の妻が持ち

音痴もう　やぶれかぶれの声を出し

今日からは名札をつけてサクラ組

夫唱婦随夜更しという家風

負け惜しみ社会が悪いことにする

洋モクの箱から専売局を出してくれ

不老長寿煎じ薬を信じきり

恩人といわれ思い出こそばゆい

酔うてるぞ酔うてえへんが終電車

耐えること久し　私の固い椅子

ローンで買えても金の要る話

まだ儲け足りぬ願いを初詣

天才の素養か末つ子左利き

初版からベストセラーのポルノもの

筆不精候文で書きたがり

好きですとそれが言えない自尊心

ヒナ壇はみな役職を誇る顔

養子の本心見抜けぬままに孫が出来

水茎の跡麗わしく嫁きおくれ

軽くパフたたいて女　市場籠

ハネムーン白いシーツが面映ゆく

この恋は無かつたことにと女文字

ホステスがおしめ洗つてる昼下り

スリにさえ天才があり道けわし

手錠かける時　人間として胸痛む

実力者まだ叱られる老母が居り

人柱埋めた哀史を聞く古城

独身の訳　自分にも言い聞かせ

それなりに路傍の草にも春がくる

キツチリと活字のような子の便り

蟻のいとなみ人間が訓えられ

子の作文父の寝酒を戒める

ギリギリの線で理性をとり戻し

ふられての戻り財布まですられ
しとやかに女に還る足袋を履き
倉も建つような話に乗せられる
ふんづまり一度は夜逃げも考える
遺言にまでハツタリをきかせとき

赤い屋根倖せそうなピアノ鳴る

セメントの地蔵でご利益疑われ

高姿勢元税務署に居た男

ガード下　響きに馴れた飯を食い

川向う二流の宿が楽しそう

投書夫人やがて作家の夢をもち

ドシャ降りになりおにぎりの昼にする

お寺にも経営学が生きていた

親の眼に角帽かぶらぬ子が寂し

湯ぼてりに女の業がふとよぎり

激突のイデオロギーに血が匂い

予約席どんな二人がくるのやら

合理主義とかで不便な予約制

同情は受けて一線守りぬき

国鉄の値上げまだかと待つ私鉄

奥様へついでながらという二伸

初孫の出来た添え書きした賀状

祭りからグレた息子は帰らない

豊葦原瑞穂の国は祭り好き

ピンボケに撮られて彼女おかんむり
焦点をぼかしてポルノ儲けてる
パトカーが来て喧嘩を乗せてゆき
せつかちはすぐ速達で出したがり
百円で芸者遊びも出来た頃

親の眼が喰い入るように聴診器

和解する心の扉開けて待ち

ノックするドアーにも愛がこもる

いんぎん無礼にスリッパ揃えられ

叱られた言葉の裏にある温み

時々は六十年の不作とも

過去帖を繰れば大小差した家

さしがねをされたことまで子は喋り

ハイカーのマナー悲しき缶の山

引出物また花瓶かという重さ

再婚の父へ疎遠の日がつづき

晩年の亡父に似てきて父恋し

情熱はただ思い出の中へ閉じ

汗くさい夫のある日たのもしく

立てひざの娘へ世代を知る無言

交番の巡査地図までかいてくれ

弟子一人もたず国宝朽ちてゆく

異端者にされて孤高を守り抜く

出世せぬ男やと靴ベラも思い

病床へ今日は読ませぬ記事があり

朝の舗道一円玉が落ちたまま

銀の串ここはホテルのバーベキュウ

ツイている時はアイデアなどいらず

実家へ出す便り倖せと書いておき

セックスの話さらりと婦人科医

七福神坐るとこなく宝船

裸踊りがおはこだとは妻知らず

血圧を気にして踊る阿波踊り

手枕の夢はしびれた頃に覚め

枯れ枝で炊く飯盒も山の味

春を待つ枝は樹氷に耐えて生き

強情なくせにワイロはそつと受け

北浜をふるえあがらす車中談

名士の放談生い立ちに少し触れ

大学へ三人あげた針仕事

焦れてる女に月給訊ねられ

向う岸を以外な人が女連れ

指先の器用倖せにつながらず

奉加帳あいつに負けぬ筆をとり

哀れ巨星　半身不随という最後

父親を異性と意識しだす頃

金借りる話へ冷房きき過ぎる

ふる里の森なつかしき秋の音

風呂敷もまともに結べぬ赤い爪

明け方に労使はやつと手を結び

乾杯の酒をこぼした借り衣装

間をおいて悠々拍手待つ構え

本社風吹かせて課長そり返り

儲かつた連想　芦屋に家が建ち

酢につけてやりたいような堅物で

論争にとどめを刺した年の功

企らみへ天罰などは考えず

三代目まだ仁侠の血が潜み

倖せはこの新妻と青畳

民宿の畳　磯の香も添えてくれ

割勘の箸の動きはせわしない

同権のはず大小の夫婦箸

新世帯たつた一間にあるゆとり

帯とけば四・五枚落ちたポチ袋

栓抜きを帯にはさんだ職に生き

続き柄一応妻と書いておく

わら灰を知らぬ子供にどう話そう

日曜の昼寝に匂う青畳

雑音は聞くなと先輩ありがたし

写経する机汚れた過去がある

出世せぬ人やと机も諦める

耐えてきた限界家裁の席につき

当然のように昼寝もしてる妻

妻なりにくらしの指針たのもしく

進学の指針は親と別にもち

妻も子も忘れて暴走してみたし

妻の座へどつかり　平気で嘘も言い

爪染めて相手は自分で選びます

産みますと未婚の母になる勇気

花盛り静かに廻る花時計

板前を褒めて残りを包ませる

うずもれた素質を他社から引き抜かれ

ざるそばの上におまけのような海苔

どたん場で女の覚悟恐く聞く

サラ金の悲劇へ怒りと哀れみと

妻と子とローンで人生無に終り

政治不信ただ黙々と金を溜め

落ちつけ落ちつけ税務署のドアー押す

実印を握つて妻の座も堅し

入試祈願　ＯＫとはおつしやらず

紅葉も散つてしまえば汚ならし

禁酒した身の乾杯はなめておき

雑筆あれこれ

噫　路郎先生

私が川柳の道に入った初歩の頃から、手ほどき、添削といろいろ指導して下さった、金沢の安川久留美師が

竜天に登る兆や雲の色

という句を残してあの陋屋に奇人の生涯を終えられたのが、丁度、八年前の春もまだ寒い頃、

今又「川柳は人間陶冶の詩」であると、泌々教えて頂いた路郎先生が

雲の峯という手もありさらば　さらばです

という句を残して、あの世への旅人として逝ってしまわれた。

愛別離苦の悲しみもさることながら、私にとってこの二人の師がいずれも、その辞世の句に於て、自ら昇天の意を顕しておられることに、大変感銘を受けたのである。

安心立命というか、悟りというか、そうした心境に終始した人生、実に尊い教えをその句に感じさせられると共に、余命十年もないこの自分が果して臨終までに、その心境に到達することが出来るであろうかと、危惧する次第である。

最後に、私の好きな路郎師の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

を三詠して静かに恩師のご冥福を祈るばかりである。

四〇・七・一〇

川柳雑誌の終刊から川柳塔の発刊まで

感じやすい少年の頃、

「仰げば尊し我が師の恩」と胸せまる思いで歌ったのち、在校生達の「蛍の光」に送られて校門を出た、あの時の気持が丁度、川雑廃刊から川柳塔発刊までの復雑な心の推移ではなかったろうか。

今だから言えることだが、昨年十二月、故路郎先生が我々六、七人の門下生を集められて、

「川柳雑誌は路郎と共に亡ぶべきものであり、それは私の健康がこの仕事を許さなくなった時、又は死を迎えた時である」

と高遠な理想と、固いご決意を語られた時、我々はそれぞれ、その後の対策についての考えを申しあげたみた訳であった。

然し、先生はそれに就いて、良いとも悪いともお差図はなく、只その道が如何に苦しいものであるかということを、しみじみとお説きになっただけであった。

今回のご発病以来、只管、ご全快を祈念し乍らも、はかばかしくないご病勢に心を痛めていた矢先き、五月号、つづいて六月号の不朽洞句帖に出ているご作品を拝して、ハッと胸を打つものがあり、不吉な予感と共に、その後始末に対する覚悟を迫まられたような思いであった。

先ず中心人物となって頂かねばならない生々庵氏の問題を、あらかじめ路郎先生にそれとなくお話してご諒解を願い、その内に、ご病床で会談願う計画を立てていたのであったが、先生の急逝で、これは間に合わず、あの劇的なご霊前で葭乃先生を介してのご対面となったのであった。

このお通夜の晩、生々庵氏が霊前に涙を流して礼拝された時、我々の気持が通じた

のか、先生のお写真が心なしか、ニッコリ微笑まれたように思ったのは私ばかりではなかった。

ああ、思えばこの時我々門下の有志の胸中、既に「川柳塔」誌創刊の固い決意が、期せずして生れたと言っても、過言ではないのである。

ご本葬の席上、門下生を代表して生々庵氏が捧げた弔辞にも、これを高らかに宣言すると共に、この我々の決意を土産とせられて、西方十万億土への安らけき旅に、ご出発願う送葬の辞でもあった訳である。

幸にも川柳塔編集の最高責任者として、清水白柳氏のご快諾を得、その実務者としては、かって路郎先生膝下で永年、編集の名アッシスタントであった、不二田一三夫氏を迎え旧不朽洞会員三百余名を同人として、バックに持つ、この「川柳塔」は、路郎先生の霊に守られながら、洋々たる前途に船出した次第である。

どうか全国の柳人各位、一層のご指導と、ご鞭韃を賜り、故麻生路郎の遺児「川柳塔」をご援助下さい。

四〇・八・二〇

ボーナスを出す人・貰う人

出す側から

ひと昔前、労働運動ラジカルな頃の話だがある会社で、あわやストライキと思わせる処まで追込んだ年末一時金斗争が、やっと妥結していよいよ支給される際会社側は、のし、水引の印刷された袋に「年末賞与金」と書いて渡そうとして処、組合側は「賞与金」では受取れないとむくれ出し、又数回の団体交渉で、結局白紙の封筒に入替えて渡されたのが暮の三十日だったという笑い話を聞いたことがある。

成程、組合側は賃金の後払としての一時金を要求（一応筋の通った理論らしい）したのに対して、営業成績と本人達の勤怠度に応じ、あくまで賞与金として支給しょうとする会社側の恩恵的な考え方に、カチンとくるものがあったのであろう。

然し我々のように吹けば飛ぶような小企業の経営者は、ボーナスであれ、一時金であれ、出せない時はどうしても出せないのだし、無理をして組合の要求を通せば、屋台骨の方が先にふっ飛んでしまう。

そんな時の団体交渉は実に悲愴なもので。

来たなッと労組へ頬が硬ばり

団交にヒューマニズムが邪魔になり

スト権はこっちに欲しい小企業

結局は若干のアルファをつけての妥結となる次第だが、近頃は組合の執行部も心得たもので、会社の潰れない程度に加減して要求も出し、じわじわと攻撃の手をゆるめない家康戦法である。

もとより私は根がよけい出したい方のお人好だから、つい労組のペースに乗せられて、いとも和やかに話が進む有様である。

ただ、営業成績は黒字でも金融的には赤字の時、ほんとうに辛いのが小企業の宿命で。

遮断機へ金策に行く気のあせり

労組へ訴えてみる金づまり

と、こんな句も生れてくる程東奔西走のあげく、女房や子供の貯金まで一時借りして、約束の日にボーナスを払ってしまうと、張り切ってた気合も抜けて。

ボーナスを渡してしもた気のゆるみ

で何にもせずに二、三日寝かして欲しいとさえ思うことがある。

然し又、順風に帆をあげたような成績で、団体交渉も一発解決、他の企業より早目に猶々とボーナスが支給出来る時の気持は、又格別である。

講堂に全従業員を集めて、期間中の労をねぎらい、新しい年度へ一層の努力を要請して、グループ毎に、ズッしりとまとめたボーナス袋を渡してゆく得意さは何ものにも比し難い喜びである。

処が嬉しさの余り

ボーナスを渡す訓示は胸を張り

と、知らずしらず、そり身になっている、思い上がった自分に気がつくと人間としての寂しさを感じることもある。

そこで、この訓示たるや、長くてもいけず、短かくてもいけない。

ボーナスの訓示は耳を通り抜け

聴いている方は、そんな話よりも「今、貰うボーナスで女房にはあれを買ってやろう、子供には何を」と胸算用しているのだから、馬の耳に念仏とでも言う外はない。要領よく切り上げて、サッサッと渡して了うのが上策である。

又経営者としてはボーナスの効果を知ることも大きな仕事である。所詮、人間が人間を評価し、考査してのプラスマイナスであるから、全員洩れなく満足といかないことは悲しいが、一応摑んでおく必要がある。

先ず翌朝出社すると馳け寄って来て挨拶をするのは満足組で、私の顔を見てもお義理のように朝の言葉をかけてくるのは不平組である。

百万言顔色に出て面白し

最後に、ある社員から聞いたボーナス余談をお伝えして本稿の責を果たさせて頂こう。

それは昔からの言葉に「これはしたり」というのがあるが、この反対の言葉に「これは来たり」というのがあってこの使い分けがボーナスに関係があるというのである。

昔商家の番頭や小僧さんが、盆や暮にボーナスを貰った時、自分の胸算用より多くさん入っておれば「これは来たり！」と、ほくそ笑み、少なかった時には「これはしたり！」と主人の目のないことをかこったということである。

昨今のように不況ムードが長く続いては、どの会社のボーナスも恐らく「これはしたり」「これはしたり」の続出であろう。

いずれにしても好景気待望は労使共々に一致した念願である。

四一・三

処女作とその頃

私の処女作……といっても殆んど記憶がないというのがほんとうで、昨年白柳さんが古い柳誌を整理していたら、大正十四年二月号の「百万石」に、私の句が出ていたと見せて頂いたが、どうしても覚えがない。恐らく俳句を盛んに作っていた時代、川柳らしきものを選んで投句したものだと思う。

強いてそれらしい句を想い出せば

襟足にそれ者あがりとうなづかせ

であろう。確か昭和十四年頃、川柳雑誌がB版4型時代、大阪では松坂倶楽部で路郎先生の川柳講座が開かれて、地方柳人を羨やましがらせていた頃、私に川柳の作句法を教えて下さった、安川久留美さんが初歩の句として激賞してくれた句であった。

今その頃の川柳雑誌（愛読者になって初めて手にした）百八十二号を開いてみると、巻頭の頁に、軍医中佐小川静観堂氏が蒙彊で、恩賜の繃帯伝達式をやっておられる写真や、市場没食子さんの陣中吟のかこみ、それに川雑記者の留守宅訪問記中にはご長男、久介君（四才）の可愛らしい写真も飾られている。

没食子さん最近の作品にお孫さんを詠んだ句が多いが、おそらくこの坊ちゃんのお子さんがモデルなのだろう。

その川柳塔欄を見ると、今も尚、川柳塔誌や、句会に活躍しておられる、紫香、潮花、形水、いわを、久米雄氏等のお名前が懐しく見える。その半面、山雨楼、柳路、柳秀氏等すでに鬼籍に入った方々の作品が文学の不朽を示しておられる。

近作柳樽欄には、春巣、万的、文月、不水、古方（弧蓬）静観堂、喜由、栞、文庫氏等、現役組のお名前が見られる。この頃の近作は路郎選の厳しい篩（ふるい）を通った句でなかなかの佳作揃いであることも嬉しい。

「一路集」の選者には川柳文学主宰堀口塊人氏がなっておられなつかしいことである。

記事の中には路郎先生の「北支蒙彊の印象」が心を打つ、それにしても当時の先生は何とお元気なことだったのだろう。その先生も今は亡き人となり、その遺志をつぐ我々がこうして、川柳塔誌を心のさえとし、この道に精進していることは誠にしあわせであると思う。

四二・二

再びハワイを訪ねて

観光の日本人

夢のハワイといわれる、その風光を讃美する言葉は到底我々の筆では尽し難いと思うので、観光中に聞いた話、感じたことで誌面を埋めさせて頂こう。

海外への自由渡航が許されてから四年、所謂、猫も杓子も外国へ外国へと見聞を拡めに行くのはいいが、到る処で恥を知らぬ不行跡を残して、日本人の評価を落しているという話は、今迄にしばしば聞かされたが、今度ハワイ島ヒロの一流ホテルで支配人から聞いた話は、頭から冷水をぶっかけられたような思いであった。

それは、最近、某ガム会社の招待旅行客団が、このホテルに泊り、寝まき姿で廊下へとび出したり、ロビーへ現れたりはまだ我慢も出来たが、夜になると、四五人ずれでフロントに来て、「どこか女の居る所へ案内せよ」とのご注文。

日本語が解からい振りをすると、拳骨のような格好の手を突き出して「これだ！これだよ」と言うに致ってはこちらが顔を赤くしたということであった。

又その翌日、バスがキラウエヤ火山の火口展望台につくと、ドヤドヤと降り立った

一行中、十名ばかりが一斉にその場に砲列を敷いて、生理現象の処理をやったのには、附近に居た欧米人も顔をそむけたそうである。

この話をしてくれた支配人は更に続けて、「私も母国を知らぬ日系人ですが、尊敬する父母の生れた国の方々には、つとめて親身なサービスを考えているのですが、こんな人達がたくさん、ハワイに来られるのは悲しいことですよ」と結んで淋しく笑っていた。

実にその通りで、我々はもう四等国民ではない筈である。世界でも例のないと言われる戦後の復興を成し遂げ、続いて産業、経済の伸展、生長を示した日本、その国民が、「旅の恥はかき捨て」とばかりに、節度を失いエチケットを忘れた国外での不行跡は、深く慎しむべきことである。

特にハワイ今日の隆盛は、明治初年以来、日本人移民の一世や二世達が誠実と勤勉によって築き挙げた功績にまつ処多く、全住民の日本人に対する尊敬の念は随所に顕れており、現在ハワイ洲の政治、行政、立法の府はもとより、経済、金融界の重要なポストを握る大半の人は日系市民で占められている現状に対しても、この国へ来ての不謹慎な行動は、これら日系人への顔に泥を塗るようなものである。

私は静かに麻生路郎先生の遺作

古くとも僕には仁義礼智信

の句を思い浮かべて自らの襟を正した次第である。

ウイロー社句会

何と言っても趣味の友は懐しい。はるか三千海里を距てたこの群島の一角に、同じ十七文字の詩を詠む友を訪ねて、語り合えるさえ楽しいのに、わざわざ私の為に、歓迎句会を催して頂いた、ホノルル、ウイロー吟社の方々に、深い敬意と厚い感謝を捧げるものである。

五年前に渡布した時に開かれた夏の家の歓迎句会でお目にかかった柳友の外に、新しく川柳塔の同人や、誌友になっておられる方も加えて二十名余り、生々庵理事長の色紙や、栞、小松園、梅里諸兄から寄せられた短冊等をお土産に差上げてから句会が開かれた。

兼題「世評」と「電話」の選と披講を終えてから、「いのちある句」についてのお話をした後、作句上種々の問題を話し合い、一層柳友としての絆を強くすることが出

来たのは幸であった。

それから、あき坊氏の接待による酒宴に移り益々、談論風発、名残り惜しくも一同散会したのはさわやかな夕風がそよぐ頃であった。

翌日、魔花麗氏のご好意でＫＯＨＯ放送から「川柳の話」と題して三十分、一般にわかるような川柳談を放送してＰ・Ｒが出来たことも何よりの収獲であったと思う。

四二・五

川柳は患っていないか。

こういう課題が出てくる処に、川柳は今なお、患っているのだと思う。

然し患った後に、朗らかな小康があり、これも又、時を経れば懐疑と混迷に陥入って、再び新しい疾患期に入るのではなかろうか。

かくて永遠に、糾う縄のように繰り返し繰り返し磨かれていくのが、芸術の道であり川柳の道だと信ずるものである。

我国、川柳中興の祖と言われる井上剣花坊氏が、当時（明治三十六、七年頃）病膏

盲期にあった柳壇に対し、
「狂句のような川柳を排撃せよ！本質的川柳に還れ！」と叫び、その著「新題柳樽」が導火線となって、澎湃として起きたのが現代川柳なのである。

種馬に雌馬少しも惚れて居ず
水炊きになる三日前鶏の恋
あの船のどれにも帰る港あり
人間の道徳蠅と相容れず
親の親その前の親もう知れず

これは私の書架にある剣花坊句集から、抜き出した作品だが、その一句、一句に流れる柳脉とでもいうものに、当時の革新川柳を感じさせる。
爾来、六十余年、有名、無名いろいろの人が「川柳は斯くあるべきだ」と主張し、論議し、「柳詩」と名付け、「俳詩」と命名し、より新しいジャンルに突入しようと、涙ぐましい努力を重ねたことは尊いことだと思う。
所謂「川柳闘病生活」である。
このことに関して、亡き麻生路郎先生もこう言っておられる。

―僅か八年か十年ぐらいの川柳作家が「川柳の壁に突き当って、ニッチもサッチもゆかない」等とよく言うが、川柳の壁というものはそんななまやさしいものではない。――中略――もっと謙虚な態度で、先人のなめて来た創作上の苦悩に続くべきではないか。

豆秋君の「**みの虫のなんぼ匐うても壁だった**」という句をよくよく味うてみるがよい。

それこそ川柳の壁は一生かかっても、突き破れないかも知れないのだ――中略――今は皆が川柳の壁へ向って匐うているのである」と。

実に至言というべきだろう。かくて我々は川柳の道に生きる限り、永久に患いつづけて行くことであろう。

四三・二

とつくにの旅で

「群盲巨象を評す」という言葉の通り、僅か半月ぐらいアメリカやメキシコを廻っ

た見聞記を、どれ程詳しく書いても正鵠を得たとは言えないであろう。

ここでは只、感じたこと思ったことを一つ二つご披露して責を果したい。

✡空路からアメリカへ入る場合、必ずホノルル空港の税関で査閲を受ける。何も引っ掛る物はない筈だが一寸胸が騒ぐ。

大きなスーツケースをかき廻していたゴツイ顔の税吏が、突然、「ホワット　イズ　ジス　ブック」と怒鳴るように訊ねてきた。

これは、ハワイの柳友達に贈るつもりの句集「老の坂」十冊である。要するに同じ本が十冊もあるので、不審に思ったらしい。

咄嗟のことで「川柳の本」ということを、どう言えば解ってくれるかと思案したが「ジスブック　リツン　バイマイセルフ　イツア　ポエトリイ！」と答えてやると「オウ！」とうなって句集の一冊を取り上げ、バラバラッと見たあげく（日本字不解）巻頭にのせた私の写真を見ながら、急にぶあいそな顔をほたろばせて「詩というものは、いいものだ」と言いながら他の鞄は調べもせずに、ＯＫのチェックをしてくれたが、これも川柳の功徳。詩人の端しくれの幸だと思った。

詩の本が恐い税吏をほころばせ

✡サンフランシスコの空港待合室で、はからずも出征する若いマリン達を、家族や恋人等が見送りに来ている風景にぶつかったが、その母親達が泣き乍ら息子と別れを惜しみ、恋人同士は固く抱き合って愛別離苦の悲しみを分ち合っている姿を見て、我々が二十数年前に味わされた悪夢を想い出すと共に「どんなに悪い条件の元でも平和ほど尊いものは無い」と言った外国の学者の言葉を噛みしめ、平和な日本に感謝した次第である。

出征の兵見送る母の涙傷まし

四三・五

雅号ぶっちけ話

編集部から、私の雅号について書くよう要請があったが、そもそも雅号とは、文人、学者、画家などが本名以外につける風雅な別名、筆名である（広辞苑）とすれば、私は非俗でみやびた人間でもなく、俗臭紛紛たる凡愚、元来趣味のすさびから入門した俳句や川柳の道、そんな大げさな別名はおこがましいと考えていた。

ところが、昭和十三、四年頃、川柳の手ほどきをして貰っていた安川久留美氏がやって来て「そんな堅苦しい本名で川柳を作ってもふさわしくないから、俺が雅号をつけてやろう」ということになり、当時私が定期貨物自動車会社の重役だった関係で「トラック」＝即ち「登良久」と命名され、「俺の一字も入っている」と悦に入って一緒に飲みに出た思い出もある。

その後、昭和二十六年から大阪に来てタクシー会社を創立－二十八年には路郎先生の不朽洞会の末席にも加えて頂き「多久志」と改めると共に、俳人が俳号と称しているのにならい「柳号、多久志」と称して表札にも名刺にも本名の横にこれを表して今日に至っている。

時々北陸方面へ旅行して昔の柳友に逢うと「登良久さん」と呼ばれ「あゝ俺のことだな」と、川雑金沢支部時代の懐しい思い出がわく。現在の商売は自動車販売（日産）に変っているが、改号の意志もない。

それにつけても、二つの柳号とも、川柳入門の指導をして貰った「久留美」さんの「久」の字がはずれないのも不思議な因縁といえよう。

四四・一

年末・年始

いつもこの頃になると思い出す句が三つ、四つある。

十二月うれしい風も少し吹け

これは路郎先生が、苦しい生活の中に歯を食いしばって川柳雑誌の刊行を続けておられた頃の作と聞くが、先生亡き今にして一入、当時のご心境を追憶して尊くも感じさせる。

除夜の鐘借金とりも寝たかしら

これも今は亡き先輩、香林氏の句である。当今の若い人に歳末の借金とりや、掛取りといった言葉のニュアンスは解って貰えないが、明治・大正の人間には所謂「金に恨みは数かずござる」でこんな切ない思いで、正月を迎えたことも再々あった訳である。

それにつけても有名な古川柳に

元旦にいけしゃあしゃあと甦り

というのがあるが、これは大晦日に借金とりを撃退する方法として「実は、大事な主人が今朝、頓死致しまして……」と逆屏風の内に主人を寝かせて、死人の真似をさせ、

女房は空涙を流しながら、お払いの延期を乞えば、鬼のような借金とりもその光景に同情して、払いを待ってくれるばかりか、香典まで置いて帰る者さえあったそうである。

明くれば元旦、死んだ筈の主人は目出度く蘇生して、シャア、シャアーとお屠蘇を祝っていたという昔の浮世話は、ユーモラスで面白い。

謹賀新年金は返すと書いてなし

これは柳友川村好郎氏の句。事業に失敗して夜逃げ同様に、北海道へでも行ってしまった友人が、毎年正月になると筆跡も見事な年賀状を欠かさずにくれるのだが、貸してやった金のことは忘れた訳でもあるまいに、何とも言ってくれないもどかしさ。どうせもう、諦らめてはいるものの、遠い空の下でどんな生活をしているやらと、ほのかな友情さえ感じるという、心暖たまる句である。

四四・一

既成観念の打破

昨年十二月号の本欄で、本田恵二朗氏が「二つの流れ」と題して新しい傾向の句と旧来の句に対して述べておられたので、私の考えも述べてみたいと思う。

おそらく、恵二朗氏の言われる「本格」というのは、某柳社の唱える本格川柳とは違うが所謂、旧来の本流とでもいう川柳の中にも激しい革新的な感覚を盛られた句は多く見られるし、（路郎先生の句集、旅人などの中でも）又革新派といわれる句の中にも、チョン髷的な思想の窺える句もある。要するに我々日本人は悉くと言ってもよいくらい、自分の基準で、自分の経験で、自分の毎日おかれている場を判断の基準にしてものを考える癖が多い。従って既成観念というか、一つの固定した考えを打ち破ることの出来難い狭さの中に生きていることに、先ず反省をしなければならないと思う。

最近、犬養道子さんから聞いた話だが、従妹さんのご主人がオーストラリア大使館へ転任が決まった時、夫人は先方の大使館に電話して、南に広い芝生の庭がある家をさがして貰い、いよいよその家に入ってみてハタと驚いた――太陽は家の北側に当た

って廻っていたからであり、折角の芝生の庭も子供達のよき遊び場にはならなかったのであった。

我々が小さい時から、常に太陽は南を廻っているものだと思い込んでいた、その既成観念が無惨にも打ち破られたのである。

学校で習った地理では、地球は丸いもので赤道はその真中を通っており、日本の位置は赤道の北にオーストラリアの位置は南にあるということもよく知っていた筈なのに、こうした結果を生んだものと言えよう。この話は、我々川柳作家にとっても、深く考えさせられることではなかろうか。

四四・八

文字の難かしさ

日本語や、日本の文字の難かしさについては、イヤという程痛感させられております。短詩文学にたずさわるものは、言葉や文字の勉強が大切であると、亡き路郎先生に教えられた事を、今更のように思い出したのでございます。

それは、かれこれ十五、六年前だったと思いますが、路郎先生から、川柳雑誌に載せる随筆を四、五枚程度で書くようにとのお手紙がありましたのですが、〆切日を四、五日過ぎても送れませんでしたので、お電話があり「明日中に持って来い」との厳命でした。

あわてて、ガサガサと書いて翌晩お宅へ届けに行ったのですが、

「まあ、上がれ」ということで先生の書斎に座り、原稿を出しました処、先生は黙ってこれを読み終わると、良いとも悪いともおっしゃらずに、

「多久志君、たった四、五枚の文章に、誤字と当て字が五つもあるやないか、もっと念を入れて書かなあかん。よく文字を知っている事は、その人の精神的な財産やからなあ」と言われたのであります。

私は頭から冷水をぶっかけられたような思いで、帰って来たのを今でも記憶しております。

又ある時、川雑の川柳塔に出した句に、

「馬謖切る思い薄情に似たれども」

というのがありますが、これは皆さんも、ご承知の通り中国の故事に、「泣いて馬謖

を斬る」というのがあり、それを引用して、有能な部下をある事情の為に辞めさせる決意を詠んだのですが、原稿紙に清書する時、辞書を繰るのが、じゃまくさいのと、〆切日ぎりぎりだったので、つい「馬ショク」の「ショク」を仮名で書いて出してしまったのです。

次の句会で先生にお目にかかった時、

「あの句は、固有名詞に意味があるのだから仮名で書いたのでは、命のない句になってしまう。」と訓されて ― 辞書をくらずに、道楽書きをした事に反省をした思い出がございます。

今、川柳塔の編集をお願いしている一三夫さんが、誤字や当て字、送り仮名を、やかましく言われるのも、路郎先生の膝下で長く訓陶を受けられたからだと思いますが、確かに日本の文字や言葉は、難かしいと思います。

（本社句会の柳話から）

四五・一一

再び路郎先生の追憶

「いのちある句を創れ ― これは私が大正十三年に、川柳の社会化と初心者の指導及び、川柳の研究を目標に「川柳雑誌」を刊行して以来、今日まで叫び続けてきた言葉であり、それによって育くまれてきた多くの作家は、この言葉を金科玉条として、ひたむきに作句を続けてきた、従って多くの名作家を輩出したことはいうまでもない……以下略」

これは昭和三十二年一月刊行された。不朽洞門下二百数十名の句集「私達」に、路郎先生が書かれた序文の一節である。

私もこのお言葉通り「いのちある句」をとひたすら精進をつづけてきたにも拘らず、名作家ならぬ迷作家で終りそうなのは、地下の先生に対しまことに申し訳のないことと思っている。

憶えば私が路郎先生に初めてお目にかかり、しみじみお話を承ったのは昭和二十三年五月、先生が漂然と安川久流美さんを訪ねて来られた時、当時川雑金沢支部になっていた「魚安」― 西本三笑氏宅 ― で、浅酌低唱、三人で一升瓶を三本も空けての

快談であった。

その時に頂いた短冊の句は

春の草代議士などにふまれるな

で今も大事に保存しているが、以来川雑の誌友となり、昭和二十八年春、大阪へ出て来て二年目に、武部香林、清水白柳両氏のご紹介で不朽洞会の末席に加えて頂き、親しくご教示を受けながら十七文字の短詩から深淵な人生を探究し、哲学を学び得て作句は下手クソでも、人間としての巾が少しでも出来たことは、師恩の極みと慶びに耐えない。

今、わが家の茶の間にかけて日々愛称している

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

の句はご逝去三ヵ月前に書いて頂いた柱掛であるが、私にとってはこれが先生のご遺品であり、私が息絶えるまでの人生指針だとさえ思っている。

前文にある通り大正十三年に創刊された「川柳雑誌」は先生のご遺志によって逝去と共に一応終刊とされ、同人制による、「川柳塔」がこれを継承、茲に通刊第五三〇号を迎えて、本月はささやかながらも先生の七回忌法要を営み、その記念句会を開催

することは、我々の慶びこれに過ぐるものはない次第である。

四六・七・七

川柳味

川柳は作らないが（作れないも含めて）読むことには大変興味をもっているファンが、意外に多いものである。

同じ十七文字の短詩でも、俳句にはこのケースが至って少ないことを思うと、川柳が「庶民の中から生れた文学である」という感を一層深くするのであるが、先日もこうした川柳ファンから「どうも近頃の川柳には川柳味がありませんねえ」と詰問らしいお訊ねを受けた。この人は、川柳評論家というものがあるとすれば所謂、アマチュアに属する方で、川上三太郎ファンだから、現代川柳にはかなり理解もあるのだが、作家でもないので、柳論をたた交してまで反発することはご遠慮申しあげたが、われわれとして一顧を要する問題ではないかと反省をしてみたのである。

川柳味という定義については、私も理論的に明確なお答えは出来ないのだが、「川

柳味が有っていい句だ」とか「川柳味に乏しい」等という言葉は、われわれがよく口にすることである。

それは、決して昔からの三要素などと言った風のものではなく、川柳作家は勿論、少なくとも川柳を理解する庶民にも、何かしら共感を与える琴線をもった川柳の中に盛られたムード的なものではないだろうか。

路郎先生も「俳句でも川柳でも、黙って読んで貰って〈どうだい〉と言えば、〈すばらしいなァ〉と言ってくれればそれでよいのだ」と書いておられる。（新川柳講座）

こうした意味でも「共感性」のない川柳には「川柳味がない」と言っても決して過言ではなかろう。

最近、作者個人の感情だけをニヒルに、ラジカルに十七文字ー時には二十数字に綴って、これが川柳だと唯我独尊をきめこんでいる作家がふえて来たが、もう一度、古句はもとより川柳復興の先駆者である井上剣花坊以来の諸先生方の作品を読み、その中に一貫した川柳の精神（川柳味とも言える）を味わい、前記庶民の川柳ファン達にも嘆声を洩らさせないような作品を、お創り願いたいものである。

四七・一

ユーモア

先日、来日したアメリカ大統領が迎賓館での午饗会の挨拶で、まず日本国民の歓迎に対する謝辞に続いて「私の名前はフォードです。フォードと言えばアメリカには同じ名前の自動車もありますが、私は到底、リンカーンのように立派なものではありません…」云々と、大衆車のフォードと超高級車のリンカーンにかけて、アメリカ十六代大統領リンカーンを引っぱり出して、ユーモラスに自分との比較をした話しぶりには、思わず微笑を誘われたが、実に心憎いばかりの上品なユーモアを交えたスピーチだったと思う。

これに比べて、日本の国民は、おえら方?から庶民に到るまで、挨拶というもの（会話を含めて）はすべて、チャンきまりにやらねば失礼だという錯覚か、先入主になっているのか、無味乾燥でユーモアのかけらもないのは、どうしたことであろう。

ある人はこれを国民性だと説くが、私は決してそうではないと思う。それは近代日本人の日常生活の中や職場で「笑い」というものが、緊張に対する弛緩＝即不まじめという形でとらえられ、その笑いをかもし出すユーモアとは軽薄なもの、下品なもの

という観念が、戦後の急激な経済成長期で養われたものであって、二百年前の江戸小咄や、狂歌、川柳の中には、実に優雅でほほえましいユーモアを感じる作品も多く見かけるし、庶民もこれによって、ほのぼのとした楽しみを味わっていたのではないかと思われるのである。

では、ユーモアとは何か、と広辞苑を繰ってみると、〝しゃれ、おかしみ、諧謔〟となっているが、筆者の感覚ではこの訳語にいささか不満がある、すなわち、しゃれはジョークに通じるし、すなわち、諧謔はアイロニーに通じ、おかしみはウイットにも通じるように思う。

あえて説明すれば、これらの言葉を混ぜ合せた、上品で優雅で、ほのかに素朴な笑いを誘う表現とでも言うべきで、あくまでも人間対人間のコミニケーションに潤活油として役立つものでなければならないと思う。

よく、どぎついしゃれをとばして、相手の感情をそこね「今のは冗談、冗談！」などと言訳をするようなユーモアは下の下である。又、ふた言目には、婦人の前で言えないようなしゃれをとばす人もいるが、これ等も似非ユーモリストと言うべきだろう。

古川柳に

串という字蒲焼と無筆読み

凸凹という字無筆も感じ入り

というのがあるが、昔の川柳作家は鋭い目で、ユーモアを捕えていると思う。

四七・七

左利き漫筆

左利き人間の人権を宣言して友の会を創り、活動を開始して以来、テレビ、ラジオへの出演や全国各地の新聞にもその運動が紹介されているので、ここでは余り知られていない「左」のことを二つ、三つ書いてみよう。

先ず日本神話に出てくる神々の誕生は、いつも左が先で右は後になっている。伊邪那岐の大神が左の目を洗うと天照大神（女神）が、右の目を洗うと月読の命（男神）がお生れになったということに始まり、古代から近代初期（明治十八年）まであった大政官制では、大政大臣につづいて左大臣、右大臣の序列で優位が続いてきた。

ではいつの時代から今の右尊左卑の考え方に変ってきたかということについては詳

やかでないが、和銅、養老年間（西暦七一〇ー七二〇年）に古事記や日本記紀が完成した頃、中国から渡米した漢文が当時のインテリに普及して〝右従書き〟仮名まじりの文が国語の表現方法となり、右優先の思想が芽ばえたのではなかろうか。

とにかく地球上全人類の一割は左利きとして生れて来ており、根強い迷信に支配される中近東、東南アジア（日本を含む）を除いては、左利き人間は性能的に優秀なのだという考え方をもって育てられているから、帝王として或は政治家として傑出した人物が多いし、芸術の世界でも枚挙にいとまないくらいの天才を生んでいる。ただスポーツ界で余り知られていないのは相撲の分野であろう。

小兵の横綱といわれた栃木山、柏鵬時代の両雄共に左利き、更に現役組で北の富士、琴桜、清国、長谷川等みな、左利きの左差しで上位にのして来たものである。

左利きは独り人間だけでなく自然界にも興味のある左右の問題がある。それは台風の目がすべて左渦巻、これは地球重力に関係した回転で、台風に限らず家庭の風呂の湯を抜いた時に起こる渦巻も左巻になっている筈である（南半球では逆）再び人間の問題に戻して、老年期に入るとよく脳卒中で半身不随になる人が多いが、この場合、言語障害をも併発しないのは左利きの人だけ。

最後に左利きの失敗談では、日本が米軍に占領された時、ピストル自殺を図ったが死に至らず、生き恥をさらして十三段階上の露と消えた東条英機大将は、左利きで馴れない普通（右利き用）のピストルを使用したからだと、満州時代彼の副官をしていた栗橋中尉がしみじみと語っていたそうである。

四七・八

後　記

因に、古代日本では着物を左前に着ていたという話を、何かの本で読んだ記憶があったが、今度発掘された高松塚古墳壁画の女人像はみんな、左前衣装になっていたことでそれが実証された。

然し、その事と現代女性の洋服がみな左前で残っているのと、会社でも個人でも経済状態が悪くなった事を「左前」と言う語源は、二つの謎として、私の研究課題になっている。

なお、最近の句会で「左利き」を課題に詠んで貰ったのを五、六句ご紹介しておく。

右左使ってわたし左利き　　千万子

一流になって名も出る左利き　いわを
甚五郎引き合いに出す左利き　肖二
手袋を右からはずす左利き　酔々
添うてから初めて知った左利き　多久志

丑歳に思う

夏目漱石が友人への書簡の中で
「牛になることはどうしても必要です。我々はとかく馬になりたがるが、牛にはなかなかなりきれない。あせってはいけません、根気ずくでおいでなさい。世の中は根気の前に頭を下げることを知っていますが、花火の前には一瞬の記憶しか与えません…云々」と記している。

昨今のあわただしい世情の中で、いつもいらいらしてる我々にとって、まことに蘊蓄のある言葉である。幸に丑歳を迎えるにあたって、今年こそ牛になって行きたいも

のと、まず牛の句を拾ってみた。

今日中に着いたらよいと牛思い　　路郎

前出、漱石の言葉を句にしたようで、生前の先生をしのぶにふさわしい作品である。

御所車ひもじい牛と思われず　　新水

昔、公家の貴人たちが外出に牛車を用いる場合、行列の途上で汚物の排泄をふせぐために、飼料を制限したり、一時中止したので実はひもじい牛なのだが、堂々たる体格がそれを思わせないと詠んでいる。しかし古句に

迷惑なものは祭りの牛ばかり

というのがあって、美しく飾られた牛にも苛酷な労働があったようである。

牛の気に任せたように牛を追い　　しとし

馬は曳くと言い、牛は追うというが、この句いかにものろのろと歩く姿が眼に浮ぶ。だが、牛はいくら追われても、イヤだと思ったら、テコでも動かないのが面白い。

牛いつもロースのあたり叩かれる　　句軒

「その辺は大事なところだぞ」と思っているのに、役牛の悲しさ、いつも同じところばかり叩かれているのも哀れである。

ここが美味いと撫でたら牛がふり向いた

人間は牛さえ見れば、ステーキや、すき焼きのことしか連想出来ないのか。この句なかなかユーモアがあって面白い。

花　王

牛の目に日本人はこざかしい

近頃の牛は、イザヤ・ベンダサンのような批判をするようになったらしい……。

塔　泉

角二本牛にも自衛力があり

四次防を攻撃する野党に対し、田中総理はこの句を引用して説明すれば、みんな、納得したであろうに。

四八・一

如　是　我　聞

「丈夫は棺を蓋うて事定まる」という古言があるが、路郎先生を失ってはや八年余を過ぎた今、年を経る毎に、先生から与えられた言葉が、一層胸によみがえってくる昨今である。

私が会社の苦境で毎日、約手に追い廻されていた頃、つい作句不振の理由にしてその愚痴を言ったところ、先生は

「なる程、君の仕事もしんどいだろうが、努力によれば解決がつくという見透しがある。ところが我々芸術に携わる者はもっとしんどいのではないか。……どうしたらよい作品が生れるか。その生涯を打ち込んでも、必ずしもいい作品が生れるとは限らない。又、初めからダメだと判っていれば、打ち込んだり、悩んだりはしないが、それがわからないから苦しんだり悶えたりするのである。

自分は常に「これでよいのか」「これ以上伸びる可能性はないのか」「どうしたら現在の苦渋な作品から脱出することが出来るか」と考えながら毎日を突き進んでいる。とにかく停頓してはならないのだ。企業の経営も、作句の道も同じことだよ」

と諭されたのであった。

又、ある時「どうも忙しくていい句が出来ない」と訴えたのに対して

「句というものは、いつも巧いのが作れるものではない。仕事や生活が余り忙しい時には誰でも作れないものだ。

ひどく悲しいことが起きた時や、嬉しい出来事があった時も同様である。かと言っ

てあまりひまな時も作れないことがある。

では、どういう時に句が生れるかというと、忙しい時、嬉しい時が過ぎ去った後で、人生を静思した時に、台風のように創作欲がやってくるのである。

この時をのがしたら句は生れない。

だから、君も作れないときは作らなくてもいい。作っても恐らくロクな句は出来ないだろう。

そんな時はあせらずに諸先輩のよい句を鑑賞したり、文学的な作品を多読することに努めることである。

豆秋君の作品に

みの虫のなんぼ匂うても壁だった

という名句があるが、これなどもそうした後の静思から生れたものであろう」

と教えられたのであった。

四九・一

桜・さくら

花といえば、すぐ桜が頭に浮ぶ。ことほどさように、日本人にとっては「さくら」にまつわる想い出や、強い印象に残っていることが多いようである。

小学校に入って、国語読本第一頁の「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」を習った頃、校庭の片すみにあたった古木の桜が、枝いっぱいに咲いていて、入学の喜びと共に、世の中がパッと明るくなったような、ときめきを覚えたのを今も忘れない。

少し長じてから、強い印象に残っているのは、南北朝時代の歴史を教わった中で、楠正行が四条畷の戦いに臨む前、吉野の如意輪観音に参詣して、お堂の扉へ

「帰らじとかねて思えばあずさ弓……」

の歌を書きつけた…その挿絵に、さくらの花びらが七、八葉散りかかっているのを示されて、担任の先生が

「いにしえの武士は、君国の為にはこの桜の花の散るように、命を鴻毛の軽きに比して戦場に臨んだものだ」と話されたことである。

この思想は、その後連綿として若者にうけ継がれ、大東亜戦争の末期に、祖国の航

空基地から毎日何十機もの戦闘機で飛び立って行った、不帰の少年航空兵の胸にまで生きていたのであろう。

しかも、彼等制服の七ツ釦には、象徴の桜花さえ打ち出されていたことも、今の我々にとっては悲しい思い出の一つである。

それにつけても、「年々歳々花同じ、歳々年々人同じからず」という詩は、たぶん中国人の作であろうが、仏教の教えにも通じるこの詩も、桜花と人生を対比して、深く考えさせる真理を含んでいる。

思えば四十年ほど前、夭折した私の長男が水癌で入院していたその年の三月頃「父ちゃん、治ったら公園のさくらを見につれていってネ」と何回も繰り返していた。

だが、その望みも空しく、兼六公園の桜もそろそろ咲き初める四月なかば、彼は不帰の児となってしまった。

その時、心ある旧友からの悔みに添えられたのが、前記「年々歳々」の詩であったが、私が今日まで、苦しかった生活の中に、信仰の光明を得て生きつづけて来られたのも、「さくらを見たい」と願って逝った愛児の仏心と、この詩のおかげだと感謝し

ている。

如意輪堂武士の肩に散る桜
天守からむかし殿様見た桜
由良之助まだ来ぬ庭に散る桜
散るさくらまた来年も咲く桜
咲いて散る桜は無言　胸を刺す

四九・四

白楽天の詩作に思う

細雪、少将滋幹の母、など数々の名作を遺し、稀代の名文家と言われた谷崎潤一郎氏は、その著「文章読本」の中で〈現今では猫も杓子も、智識階級ぶった、ものの言い方をしたり、文章でもやさしい言葉で済むところを、わざとむずかしくもって廻る悪い傾向が多くなって来た。昔、唐の大詩人、白楽天は自分の作った詩を発表する前に、必ずその原稿を、無学に近いお爺さんやお婆さんに読んで聞かせ、彼等にわからない言葉があると、躊躇なく平易な言葉に置き換えたという、有名な逸話がある。

我々は常に、この白楽天の心がけを忘れることなく、自分の学問や智識や、頭脳の働きを、見せびらかそうとしたり、未だ前人の言わない用語を作ってみようとしたり、自分だけ偉がろうとする癖や、根生を改めなければならないと述べておられる。

そこで今、柳壇では「わかる句」「わかならい句」の論義が盛んに行われているが、そのいずれの主張にも、主体的な根拠が薄く、両者の作品を鑑賞させて貰っても、自己の主張と裏腹な傾向を見せている不徹底さが、目立つのはどうしたことであろうか。

先ず後者について一例を挙げれば、自らも革新作家と任ずる川柳家である句は、ほとんどが「わかる句」を主張される作家の句と変っていない点である。

又、前者については、その雑詠に於て四、五句の中に必ず「試み的」というような「わからない句」を混えておられる点である。

茲に於て思うことは、明治中期の頃、狂句猥句の泥沼から、真の川柳を救い上げようと、革新川柳の旗印のもとに、当時では「わからない川柳」と言われた現代川柳と取組み、庶民にもわからせる運動（批判はあるにせよ）に徹した井上剣花坊、阪井久良伎、川上三太郎、麻生路郎、岸本水府の各先生や、その他、諸先輩の実行力には、頭が下るのである。

しかも、この運動の根底には、文芸作品のあらゆるジャンルに共通する「共感性」ということを尊重されていたことである。

今、革新川柳家と自称する人々に、前記、谷崎先生の述べておられるような、衒いがあるとは思わないが、いずれを主張される作家も、白楽天の詩作態度を、もう一度考えてみようではないかと、反論をも期待し、敢えて一文を草した次第である。

詩の国に生れてどれが詩だと問う　　井上剣花坊

四九・五

吉川雉子郎（英治）先生とその川柳

私の尊敬する何人かの人物の中に、吉川英治先生がある。

どんな境遇の中にあっても、常に厳しく自己を見つめて生活してこられた人…「我れ以外、皆我が師なり」という、自からの言葉を信条に、若い頃は勿論、作家として名を成されてからも、なおこの謙虚な態度を崩されなかった人…ものの哀れを知り、すべてのものに思いやりの深かった人…として私の脳裏に深く刻まれた人物である。

その上、嬉しいことは、日本に文化勲章の制度が出来てから、既に百数十人かの授章者を出しているが、授章の感激を川柳で表現された唯、一人の人として、同じ川柳の道に精進する我々には、暖い親近感さえ抱かせる人である。

菊の日　も一度紺がすり着てみたし

これが、昭和三十五年秋、文化の日に授章された喜びの中で、ふと思い出された少年の日の、一番悲しかったことへの詠嘆であったのである。

そのことは、彼の自叙伝の中で

「父が最後の望みをかけていた訴訟に負けた時から、三日目か四日目に、親戚の世話で、川村印房という、はんこ屋へ奉公に出ることになった。丁度私が十四才の頃である。

今でも忘れられないのは、幼少から着なれていた紺がすりの着物を脱がされて、丁稚さんの着る縞の着物に角帯をしめさせられたことに、何とも言えぬ悲しみを覚え、便所の隅へ行って、おいおいと声をあげて泣いた」

と記しておられる。

このように当時の吉川家は、売り食い生活も底をついて、母親の賃仕事や僅かな英

治先生の給料、それに長女、次女の奉公先からの前借金で、窮乏のドン底生活が四、五年も続いた訳である。

後に、その頃を追想して詠まれた句に

貧しさもあまりの果ては笑い合い

泣きに来て泣けずになりぬ春の川

妹　弟連れてさびしい兄の顔

などがある。然し、父親が病床の人になってからは、一層生活は苦しくなるばかりで、「ある夕方、母は蚊のうなる台所に腰を下ろして、ぼんやり溜息をついていた。途方にくれた顔つきだった。母がそんな眸でいるのは何を意味するのか、僕にはすぐわかった。

晩に食べるものが無いにきまっている。僕は母を慰めるつもりで、何かあてもないことを言ったようだが覚えはない。唯、足を早めに家を飛び出した。

それから間もない後、僕は郊外の真暗な傾斜地に立っていた。眼下に大きな池があり、池のふちまで馬鈴薯の段々畑が続いている。

星の光がすべて、神の眼か世間の人の眼のように見えた。罪を意識しながら、犯行

に出るまでには、恐ろしい闘いが自分の中で動悸していた。

（それだけに、私の過去の中でも、このことは強く鮮やかである）

その晩、飢餓の一家は、塩ゆでの馬鈴薯をふうふういって食べあった。

病床の父は勿論この盗みを知ろう筈もなく、母にもその行為を叱られた覚えがないのをみると、母も背に腹は更えられぬ思いで、子の盗みを許容していたのであろうか。僕はこの時ほど母親をいとしく思ったことはない」

と、自叙伝にも記されている通り、貧苦の中でも、母親の愛情をヒシヒシと受けとめておられた点に心引かれるのである。

格子拭く母をうしろに夕べ出る

お母さんと呼んでみし用もなけれども

世の中におふくろ程の不仕合せ

おふくろは俺におしめも当て兼ねず

母あらばなど想う日の梅うらら

母を詠まれた句はたくさんあるが、茲ではこの五句だけを挙げておくが、とにかく信仰にも似た思いで母親をみつめておられたことは次のエピソードでもうかがえるので

ある。

「僕が毎夕新聞に入る前、売薬会社の広告文案係に応募した時、行ってみると、大学出の立派な履歴書を持った人が多いので、僕のように学歴のない者はだめだと思った。然し、やがて順番がきたので面接室へ入ると、そこの支配人みたいな人が、テストをした最後に……あなたは宗教がありますか、と聞いた。僕は考えてみると、信仰も宗教ももっていないことに気付き、その通りの返事をした処、……わたしの店では宗教の無い人は採用しないのです、と言って、それでおしまいになりかけた。僕は何か引込のつかない若気の気持で……いや、宗教はありませんが、母がいつも自分の胸の中にあって、僕は母を思い出す時は決して悪いことはしませんし、お母さんを思い出せば勉強せずにはおられません、そんな信仰ではいけないでしょうか……と言ったら、その支配人は笑っていたが、数日後に採用通知が来て驚いた。

それが何十人の内でたった一人だったと聞き、一層母親のおかげということを、しみじみと思った。（吉川英治対話集から）

吉川英治先生が、どうした宿縁で川柳の道へ入られたかというと、横浜ドックの船具工として働いておられた時（十九才）作業中に足場が崩れてドックの底に転落、瀕

死の重傷で入院中、いろいろ将来のことなど考え、退院を契機に、父母の許しを得て、苦学する目的で上京され、下谷西町の髪結いさんの二階、三畳一間を借りて、昼は労働、夜は勉学を続けておられた頃、当時、日本新聞の客員として少し名前の売れていた井上秋剣氏が近所に住んでいて、江戸文学の研究について教えを受けておられたのが、この人があの有名な、明治革新川柳の先駆者、井上剣花坊氏で、必然、川柳の手ほどきも受けたものと思われるが、上達も早かったのか、剣花坊主宰の「大正川柳」の幹事となり、「川柳隅田川考」を執筆されたのが二十三才の頃と聞く。

この「大正川柳」や「新川柳」という同人誌にも吉川雉子郎の作品は多く見られ、外に、若き日の川上三太郎氏、高木角恋坊、近藤飴ン坊、花又花酔氏らの名も見られる。

この頃、英治先生は既に両親を東京に引取って生活を共にしておられた様子だが、生活は決して楽でなく、勉学の為にもより多く収入のある職業へと転々せられ、毎夕新聞へ入社される迄の七、八年間は、活版工、行商、大道商人、土工、人夫、あんま、漆器の下絵職等覚えておられるだけでも二十余りの職に就いたと語っておられる。

昨年九月、当社句会の柳話でお話した「百科辞典を五十回読まれた」というエピソ

ードもこの時代だと思うが、ひたすらに本を読み、ものを書き文学の道に研讃されながら、句作にも熱意を注がれた、雉子郎得意の時代でもあった様子は次の句でもうかがわれる。

何尺の地を這い得るや五十年

この先を考えている豆の蔓

どう生きてゆくらん蝶の行くえ哉

きりぎりす半分啼いて風がふき

あめ土の中に我れあり一人あり

生きようか死のうか生きよう春朧

生きている証拠に飯を食っている

露の玉どう転んでも露の玉

四九・六

空気人間への道

路郎先生の遺句の中に

さて誰も来ぬと寂しい元首相

という時事吟がある。これは、日本が有史以来初めて、異民族に支配された被占領時代の混乱期を切り抜けて、今日の日本の基礎を作った、時の首相吉田茂がその現職を退いた直後の心境を推測されての作品であるが、内閣であれ、団体や企業などでも、その長として君臨し従横に指揮をとってきた者が、自己の意志であると否とを問わず、第一線の現職を引退した時は、長期の労苦から解放されてホッとした気持と同時に、押し寄せる惜寂感はたとえようもないものであるらしい。

私も、古稀を迎えた時、感ずる処もあり、かねて計画していた余生の夢を果すべく、一昨年五月から第一線を引いて、会長という閑職に就いたが、最初、二、三カ月は、何かサバサバとした気持で心うきうきと旅行、作句、読書、雑文の執筆と、今まで仕事に打ち込んで情熱をそのまま続けてゆける充実感に、楽しい日々がつづいたものである。

処が、七、八カ月たった頃、ふと私の胸に「これでよいのか」という一抹の不安と寂しさが湧いてくるようになり、それが一日一日と募るばかり、さんざん考えた末に、従来の仕事には半期毎の決算があって、傾倒した情熱の効果がはっきりとバランスシートに現われ、何とも言えぬ満足感を味わえたもので、今はそれが無くなった為の、不安と寂寥感だと解った時、愕然として、又もや思い上っていた自分に鞭打つはめになってしまった。

そこで、先輩である同業会社の会長さんにこの心境を打ちあけて伺った処、「忌憚なく言えば、君はまだ人間が出来ていない。企業の形態によっていろいろ会長の在り方も違うが、中小企業の会長というものは空気のような存在でなければならない、かけらほどの功名心も持たず、常に瓢々とした姿を社員の前に顕示するだけで、自余はすべてを忘れた悠々自適の生活に没入する。それでこそ名会長と言えるのだ」と教えられた次第。思えば、自分が常に座右の句としていた

寝ころべば畳一帖ふさぐのみ

という路郎師の句の中には既に前記の教えが充分に含まれていたのではないか。愚かにもそれに気付かなかった自分を哀れとも感じて、慚愧に耐えない。

今はただ、畳一帖の句意を胸に、空気のような人間になる努力を続けているが、なかなか難かしい自分との闘いではある。

捨てるものまだ捨て切れず凡夫たり

覚っても悟っても海の深さ哉

五〇・八

一分間の柳論

川柳作家達の集りで「川柳人口が一向に増えない」との詠嘆をよく聞くが、ではどうすればそれが可能かといわれても、具体策はちっとも出てこないのである。それは何故だろうか…思うに、柳歴が十年、二十年の指導者級作家になると、それぞれ独自の句境を打ち立てて精進している為に、初心者のいわゆる「その通り川柳」や「説明川柳」の添削に力を入れていると、自分の句が荒れてくるという理由で、ついつい川柳人口の増加を怠っているのではなかろうか。

だとすれば余りにもエゴイスチックな川柳家だと言わざるを得ない。よく「俳句百

万川柳十万」とその作家人口をいわれてはいるが各新聞や雑誌の柳壇、特に時事川柳に大変な興味をもって読んでいる、作らない川柳家は俳句のそれを上廻る人口だと思う。こうした人々を作家の域まで拾いあげてゆく努力こそ我々に課せられた使命ではなかろうか。自分達がこの畑に入った時を考えてみよう。

五〇・一〇

干支（えと）と辰（龍）年

毎年正月になると、新聞、雑誌は必ず、その年の干支に因んだ記事で賑う。おそらく書いているジャーナリストも、それが迷信的なものだと知りながら書いているのだから世話はないが、古来、日本の庶民階級に根強くしみついた干支への、信仰にも似た興味が異状なものであるだけに、私も日本的ジャーナリズム流にペンを採ってみた。

そもそも、この干支が日本に渡って来たのは、今から約千二、三百年前、天平の頃といわれ、以来この思想の背景には、人間の吉凶禍福がからみ、易学（占い）とも密着したために、その観念と行事が庶民生活と切っても切れないものになったのであろ

う。

現代でもその代表的なものは、人間の命名に干支を援用する事例が多いことで、大臣や政治家、大学教授といったインテリの中に、寅雄、卯一郎、丙午、辰三などという名前を見出す時、なにかほほえましいユーモアさえ感じるのである。

さて今年はその十二支第五番目の辰（竜）年であるが、その竜とはどんな動物なのだろうか。――十二支の研究家で有名な諸橋轍次先生の著書によると、先ず、十二支にあてはめた動物中、唯一の架空動物で、角は鹿に似て頭は駝に、眼は鬼に、首は蛇に、腹は蜃（みずち）に似ている。さらに鱗は鯉に、爪は鷹に、掌は虎に、耳は牛に似ていると記され、昔からよく寺院などの襖に画かれた竜の姿を現わしている。

面白いことは、その竜には喉の下に一尺四方ぐらいの逆さ鱗があって、ほかの者がこれに触れると凄まじい勢いで怒りだして、相手を生かしてはおかないということである。それで昔中国では、天子の怒りに触れることを「逆鱗に触れる」などと言い、天子の位いの動物とされていた。

さて最後にこの竜を我々川柳人はどんなに詠んでいるだろうか、

竜　天に登る兆しや雲の色　　久留美

これは川柳家というより、金沢の奇人として有名な安川久留美氏が辞世の句として残したものであるが、同じく彼の作品で

竜　天に昇る襖へ執達吏

というのもあるが、いずれも胸を打つ鋭さと含蓄の深さただならぬ句である。その他にもと、昭和初期からの辰年四回それぞれの一月号柳誌を調べてみたが、僅かに

東洋の神秘にゆらぐ竜のひげ　　青竜刀

書道展　竜の一字が生きている　　東　里

の二句しか無かったのは、少し寂しかった。

五一・一

進化の速度

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず」

これは中世の歌人、鴨長明がその随筆――方丈記の中で述べている言葉であるが、仏徒の心を以て人生を観じたもので、後世、兼好法師や芭蕉の思想もこれを継ぐものと

して高く評価されている。

然し私は、この言葉の中には更に、世の中の進化形式は斯くあるべきが常道だ……という訓えが、強く含まれていると解釈するのである。

すなわち、世の中が日と共に移り変ってゆき、すべての面で進化成長の跡を示していることは、まことに喜ばしいことではあるが、急変とか激変を好まない人間の通有性を尊重した変化であり進歩でなければ、決して実を結ばないと考えるのである。

最近、政治の面でも、革新系二野党の政策の中に、安保や軍備の問題で著しく柔軟性をみせており、また総選挙の結果にも、こうした変化形式が庶民の心理だということを示しているのではなかろうか。

こうした意味で、我々短詩文学の世界を顧みても、革命的な作風のものは幾度か興廃をくり返しているが余り永続していないことに気付くのである。

川柳でも、ある同人誌で主宰者が亡くなられてか急にその作風が変り、ついてゆけない伝統の同人達との間に紛争が絶えないという事例も起きている。

幸いにも、恩師麻生路郎の流れをくむ川柳雑誌から川柳塔への作品にみる進歩、成長の速度は、遅々とした大河の流れの中で、着々とその本質を変えていることに欣び

を感じるのである。

一例を路郎先生の句に探ってみても

妻や待たん　靴音を高めんか……から

凡聖一如　元旦の心知る……までの作品に三十年の歳月が流れているのである。然もこの二句とも、当時はそれぞれ異端の句として敬遠さえされた作品である。

この例は、師の門下で現在の生々庵、栞、好郎、小松園、古方氏らの作品にも同じ傾向を見ることが出来るのである。

（引例句は紙面の都合で割愛する）

過日もある先輩と話し合った時、彼が「やたらに革新への野心ばかり燃やして、追っかけられっぱなしの人生には妙味もなく、そこから生れる川柳は必然、人間陶冶の詩にほど遠いものだ」と喝破していたことに、私は自説への信念さえ深めた次第である。

五二・一

三分間で終わる結婚披露宴のスピーチ

本日はまことにお目出度うございます。

○○君の上司として、一言、餞けの言葉を申しあげたいと存じます。

私の恩師である麻生路郎先生の川柳に

「**いつまでも肉と葱との仲であれ**」というのがございます（句は詠調で復唱する）

思うに夫婦生活というものはこの川柳のように、スキ焼鍋にほりこまれた肉と葱のようなもので、砂糖を入れ、醤油を入れ、適当な火かげんで煮てゆきますと、葱には肉の味が泌み込み、肉には葱の香りが移って、何とも言えぬ味合いになるのであります。

然し、この場合、砂糖が多過ぎれば甘くて食べられず、醤油が多過ぎれば、これ又、辛くて口に入りません。

ほどほどの砂糖と醤油、それに適当な火かげんが大切なのでございます。

どうぞ、結婚という鍋にほりこまれた貴方がたお二人も、甘からず、辛からず、ほどよい愛情の火かげんで、牛鍋の中の肉と葱の様においしい、倖せな家庭生活をつづ

けて頂きたいと、心から念願する次第でございます。

「**いつまでも肉と葱との仲であれ**」＝復唱＝　大変失礼致しました。

忘れ難い川柳大会

毎年各地柳壇でいろいろな記念句会が盛に行われ、我々もよく出席させて頂き、記憶に残るものも多いが、私の永い川柳生活の中で一番印象深いのは、いささか自画自賛になるが、アメリカ建国二百年祭を記念して行われたホノルル、ウイロー川柳社と川柳塔社との日米交歓川柳大会ではなかったろうか。

それは一九七六年（S・五一）一月二十一日ホノルル、ワイキキ海浜のカイマナホテル、インベリアルルームで開催された。

来賓は日本領事館の富樫主席領事の外、ホノルル著名の日系有識者十数名を迎え、川柳人は遠くサンフランシスコから二名、ホノルルやマウイ島在住のウイロー社同人三十名、日本側から四十名が加わっての大会で、実にすばらしいムードの中で行われた。

詳細は、川柳塔誌第五八六号に、三井酔夢、野村太茂津、大路美幸、玉置重人、宮

西弥生等の各氏がペンを労しておられるので省略するが、当日の日系新聞記事並に、席上で述べた私のご挨拶を記して、終生忘難い川柳大会記としたい。

☆日米交歓川柳大会　昼は句会、夜は祝宴盛況（ハワイ報知紙）

二十日に来布した大阪の川柳塔社四〇名とハワイ・ウィロー社の日米交歓川柳大会が二十一日午後一時から、カイマナ・ホテル・インペリアル・ルームで開催され、ハワイ色豊かな「波のり」「レイ」などの兼題で作句がなされた。

また午後六時からは歓迎夕食会が行なわれたが、歓迎会で磯島夫人からレイを贈られた若本団長は早速「友情のレイ川柳が匂って来」と一句をものした。

午後一時から行なわれた句会は、佐藤秀夫氏の司会で次のように行なわれた。

△開会挨拶司会者△柳話川柳塔社団長若本真彦先生△選句選者「判断」野村太茂津、「観光」林蒼蛇楼、「しつけ」菊沢小松園、「波のり」市岡暁舟、「番組」西尾栞、「レイ」前山北海△ハワイ事情講話並スライド上映バロン後藤博士△披講並賞品授与与。

また六時からの歓迎会は市岡暁舟氏の司会で次の如く行なわれた。

開会の辞司会者市岡暁舟△レイ贈呈＝川柳訪米団長若本多久志氏へ磯島雪、同副団長　西尾栞氏へゲーンス美千香夫人△先亡者へ黙祷△食前の言葉林蒼蛇楼△来賓紹介磯島三石△歓迎の挨拶及び若本団長へ記念否贈呈大会委員長前山北海。

△祝辞＝富樫主席領事、ハワイ日系人連合協会長吉上生、報道機関代表平井隆三、川柳訪米団長挨拶若本多久志、川柳塔理事長中島蓬太郎（生々庵）氏、メッセージ朗読橘高薫風、麻生葭乃夫人、メッセージ代読西尾栞、ウイロー社よりお土産贈呈宮西弥生夫人へ磯島三石、△日米交歓川柳大会万歳日本人商工会頭田村一郎、来賓万歳ウイロー社上田紅渓、川柳社ウイロー万歳川柳塔代表島居百酒

☆日本側、大会挨拶

本日茲に、栄誉ある来賓各位をお迎えして、念願の日米交歓川柳大会が開催されましたことは、我々の最も喜びとする処でございます。

もとよりこれは、ご当地、ウイロー川柳社の皆様が、昨年来いろいろその準備に多大のご熱意をお示し下さいました賜ものであり、深の感謝の外はございません。

ウイロー川柳社はご創立以来、我々と同じように亡き路郎先生のご指導によって、

たゆみなく川柳の道にご精進なされ、路郎先生亡き後もわれわれ川柳塔社との姉妹関係を深めて下さいましたーその暖かいご友情が、今日茲に実を結んだものと存じます。

現在、日本には四百数十社の川柳グループがございますが、海外に於てこんなすばらしい姉妹グループをもっているのは、我が川柳塔社を措いて外に無いことを思います時、我々はその光栄と名誉をしみじみと噛みしめ、改めて皆様に厚くお礼を申しあげる次第でございます。

顧みますれば、私が初めてご当地を訪れましたのは一九六二年、今から十四年前で、まだ観光などの自由渡航が許されていなかった頃でした。ホノルー空港へ着きました時…路郎先生から、前以ってご連絡をして頂いた関係もありましたが、前山北海さん古川魔花麗さん築山快夢起さん等、皆初めてお目にかかる方々でしたのに、暖かいお出迎えを受けて、お一人お一人から、馥郁たる香りのレイを顔も埋まるばかりに掛けて頂きました時は、うれしさに胸が一ぱいになり、川柳によって結ばれた友情の有難さをつくづく感じたものでございます。

更にその翌日、山の手地区の「夏の家」という料亭で、私の歓迎パーティーを兼ての句会が開催され、席題二つも選を仰せつかりました。

その後、二、三回ご当地へお伺いしておりますが、その都度、同様のご歓迎を賜わっておりますこともやはり川柳の畑に生きてきたおかげだと、まことに感謝に耐えない処でございまして、今後、命ある限り川柳の道に精進致しますと共に、ハワイ川柳人との交遊を、さらにさらに深めさせて頂きたいものと念願致すものでございます。

この度、お言葉に甘えて、すっかりお膳立をして頂き、大勢で押しかけて参りましていろいろご厄介をかけましたことを、重ねてお詫び申しあげてご挨拶と致します。

川柳塔社訪米団代表　　若　本　多久志

私の尊敬する人びと

人はそれぞれ、自分の尊敬する人を何人かもって、その人間像に、自分を一歩でも近づけてゆきたいと願望し、努力しているものだ。おそらく、大方の人がそうであるように、私にも何人かの尊敬する人があり、常にその人々を胸に描いて自分の至らなさに悩み、苦しみながら七十余年の人生を歩みつづけてきたものである。

では私の尊敬する人物とはどんなタイプの人間かというと／常に自己を厳しく見つ

めて生活してきた人／才智や学識があってもイバラない人／もののあわれを知り、すべてのものに思いやりの深い人／以上の三つに絞ることが出来る。が然し、私が尊敬する人を決めたときに、この三つの条件に合せて選んだものではなく、それらの人びとを胸に描いてから、分析してみると、偶然にそうした共通点を発見して、自分でもある驚きを感じているのである。

その人びととは、まず古い時代の人では上杉謙信、若い頃の羽柴秀吉、親鸞聖人。現代の人では島崎藤村、松下幸之助、吉川英治などで、それぞれ皆、共通して前記三つの性格的特徴をもっておられることは、あらためて私の心に秘めた人間像を再認識すると共に、一層それらの人びとに対する尊敬の念を厚くし、親近感さえ覚えるのである。とくに吉川英治さんは、無名の頃〝雉子郎〟という雅号で、私と同じ川柳の道に精進されていた事や、戦後何十人かの文化勲章を受けられた方がたの中で、その感激を十七文字の川柳で表現された、ただ一人の人間として懐しくさえ思われる。その吉川さんが平素話しておられた言葉や、あの多くの作品の中で、いろいろな人物に語らせている言葉には、汲めども、汲めども尽きない人生訓や処生訓を見出すことができた。中でも私の一番好きなのは「我以外皆我が師なり」という言葉である。

吉川さんの学歴といえば小学校四年と高等科三年まで、あとは苦しい生活と闘いながら、ずっと独学を続け、百科辞典を五十回も読んだというエピソードさえある研学の徒で、日本文学界に大衆文学という新境地を開拓し、昭和三十五年秋には、国の文化勲章を受賞された七十年の生涯は、すべてこの「我以外皆我が師なり」という言葉の実践ではなかったか、と感銘を深くするのである。

ところが、同じ時代を、同じような運命のもとに生きてこられた松下幸之助さんが、またこれと同じ謙虚な言葉で、自分を律してこられたことである。松下さんが古稀の賀を迎えられた時、新聞記者のインタビューで「成功の秘訣は」と訊ねられて、「私は学問がなかったから、他人が皆、私より偉い人のように思えた。だから、卒直に人の意見に耳を傾けることが出来た。私は今でも人の意見をよく聞いて、そこから多くのことを学ぶ場合が多い。他人は自分より偉いのだ、自分にないものを持っているのだと考える方が、結局は自分を早く、確実に伸すことが出来る」と語っておられた。私が平素、若い社員にアドバイスする言葉に、「よく本を読み、ひとの話をよく聞き、そしてよく考えて進め」と言っているのも、前記二人の言動に教えられた賜ものであ

る。

さらに、吉川英治、島崎藤村、親鸞聖人に共通しているのは、弟子とか門弟という者を嫌って、もたれなかったことである。そのことを吉川さんは「私はまだひとから教えを乞う身分、人に教えるという才能はありません」と最後まで弟子入り希望者を落胆させており、藤村さんは、篤実、重厚な人で天明愛吉という文学青年に出した手紙の中に「簡単に予の志をいえば、予は弟子という者無くて過さんと願えるなり。先生という言葉を聞く毎に、予は胸痛さえ心地す。願わくば予一人を頼まずして、すべての人を師とせられよ云々」と書いておられる。

また親鸞聖人については、浄土真宗の聖典ともいわれている、唯円房の書いた「歎異抄」の六節で「専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子という争論の候らんこと、もっての外の子細なり、親鸞は弟子一人をももたず候」云々と説かれている。

われわれが、この激動、狂乱の社会でも人を傷けず、自己の信念に生きてゆく上で、一番大切なことはこの謙虚な心と、その態度ではなかろうか。それから、吉川英治晩年の作品に「新平家物語」というのがある。保元・平治の乱を中心に、骨肉相食む地獄絵図の中で、人間清盛がどう生きたか、人の世の栄枯盛衰を克明に描き、そしてあ

の最後の物語りで、麻鳥夫婦に、「人間は皆、なぜ、金や位階や権力を、あんなにまで血みどろになって争うのでしょう」と語らせているのは、「人間の幸福とは、平凡の中にあるもので、人はそれぞれの天分にしたがって、その職分を果すことが、人間として一番りっぱなことだ」という哲学を物語るものであり、このことは、上杉謙信の晩年の言葉にも似て、たいへん心をうたれるのである。

（S・五一・四）

私の選んだ路郎賞候補作品

四一年度

社長室友は昔の友ならず　工藤甲吉

母の文鉛筆なめたとこわかり　越智一水

ほのぼのと女の謎がいまわかり　浜田久米雄

四二年度（本年度に限り川柳塔賞分担当）

貧しさを炊けば貧しい音で煮え　渡辺しげ彦

人づてに夫の逝去聞くえにし　白井孝子
身もごってこの生涯の重たさよ　梅園摩耶

四三年度

僧正ケ谷　雨も寿永の色なるか　正本水客
あたたかい掌だった再婚するときめ　越智一水
老いて子に従い朝はパンにする　安藤桂仙

四四年度

父の歳より長く生き父を識る　後藤梅志
何気なく降って五月雨慈雨にされ　清水一保
木枯よ吾子の墓標よけて吹け　宮尾あいき

四五年度

横に這う蟹宿命に逆らわず　藤井一二三
うっとりとする愛があり無一文　天正千梢
野良犬の誇り鎖の音がない　福井野迷路

四六年度

大文字酔い醒めるよりはかなしや　橘　高　薫　風

ただれた心　観音様が抱いてくれ　天　正　千　梢

質屋へも通わせた肩揉んでやり　出　原　敬　一

四七年度

落葉にも居心地のよい隅があり　若　林　草　石

蝶々のつかれ地蔵の肩を借り　高　橋　鬼　焼

横断の母の背中で旗をふり　隠　岐　不　酔

四八年度

落ちつかぬ心へ香を焚いてみる　本　田　恵二郎

ひと針ひと針縫うて男を追いつめる　鈴　木　村　諷子

大の字に炎えて仏の去り難く　高　杉　鬼　遊

四九年度

一と粒の種　太陽は見逃がさず　本　田　恵二郎

生き抜いて流転の風を聞くばかり　羽　原　静　歩

母さんの墓　かあさんがいる温み　宮口笛生

五十年度

悔のない汗　千金の夢追わず　林　瑞枝

その功を語らず乳房うなだれる　増田竹馬

ちっぽけな善意でもよし心満つ　高橋操子

五一年度

茶碗置く音のまるさや有難し　堀江正朗

地の底の母までとどく冬の雨　高杉鬼遊

信念へ廻り道した日を悔いず　八木千代

五二年度

春めぐる母なる匂い蓬摘む　水粉千翁

勝馬の淋しい顔を見てしまい　小野克枝

一期一会　みな邯鄲の夢なりし　和田幾久子

五三年度

着飾らぬ女に母の顔ダブル　那須鎮彦

道遠く追い抜く雲をとがめまい　水粉千翁

昆布煮る匂いの中に亡母と居る　本間満津子

（以上）

あとがき

我われ年代の者が二、三人寄るとすぐ「明治は遠くなりにけり」というような懐旧談に花が咲き、路郎師の

「古くとも僕には仁義礼智信」

という句などに一入の親しみを感じるのであるが、そんないい時代に生れ、育った自分が今、この激動と狂乱の果に、不確実性時代などとさえ言われる世界情勢の中に立って、七十余年の生涯をふり返ってみる時、実に無量の感慨に打たれるのである。

幼少に両親を亡い、学歴らしいものとてもない薄倖、凡愚の身で、幾山河を越えてきた道は決して平担ではなかったが、すべて、み仏の導きと、ご先祖の加護による正しい道には、よき先輩、よき友、よき部下を与えられて、踏み迷うことなく今ここに、稔りある金婚、喜寿の秋を迎え得た想いは、只々感謝の念で一杯である。

さらに、人生の伴侶とした陶冶の詩、川柳は、苦しかったこと、悲しかったこと、又その幾倍かの楽しかったこと、嬉しかったことを十七文字に綴って、慰め、励まし、反省さえ与えられたことは何ものにも代え難い倖せであった。

この度、我々老夫婦の金婚と、私の喜寿を記念して「続・老いの坂」を上梓するに当り、川柳塔社理事長、中島生々庵先生から身に余るご褒詞の序文を賜わり、柳友、菊沢小松園氏に選句の労をわずらわせたことを茲に深謝して、あとがきの言葉とする。

因に諸散文はすべて、川柳塔社のご好意により同誌に掲載されたものばかりだが、行数を限られた作品が多く充分その意を尽し得ていないことをおことわりしたい。

昭和五十四年六月十五日

若本　多久志　　合掌

著者ペンの跡

川柳句集「親ごころ子心」　昭和三十四年四月
同　「老いの坂」　同　四十二年七月
米・墨視察報告と旅の随想　同　四十三年七月
掲示訓　同　四十六年七月
随筆集「凡愚のたわごと」　同　四十七年二月
続・掲示訓　同　五十年四月
人づくり（訓言集）　同　五十四年二月
川柳漫談（月刊・けいさつの友）連載（四十八年四月より五十年三月まで）

尚、昭和五十年一月より自販坊のペンネームにて、
句刊「自動車販売」紙へ「事時川柳のたわごと」
を連載中。

句集「続・老いの坂」・若本多久志著
昭和五十四年五月　印刷
昭和五十四年六月十五日発行（非売品）
印刷所　西宮プリントセンター（西宮市）